

### I

#### ■出題のねらい

高等学校までの英語学習において重要となる基礎的な文法事項と語彙力を確認する問題です。不定詞、関係代名詞、比較、接続詞といった基本文法の正確な理解に加え、文脈に応じた適切な語の選択（代名詞、形容詞、前置詞）ができるかを問いました。単なる暗記ではなく、文の構造を把握した上で、論理的に正しい語句を選べる基礎力を重視しています。

#### ■採点講評

全体として正答率は78.8%と非常に高く、受験生の基礎学力の高さが確認できました。特に

5（比較級 more）や 7（熟語 be proud of）は90%を超える正答率でした。

その中で差がついたのは 6 です。正答率は36.0%でした。「もう一つの素晴らしい映画」という意味で、単数名詞（movie）を修飾する“another”を選ぶべきところ、副詞の“very”（21.8%）や接続詞的な“so”（28.8%）を選んだ誤答が目立ちました。“another”が「もう一つの、別の」という意味で単数名詞と共に使われる用法を、今一度確認しておく必要があります。

### II

#### ■出題のねらい

日本の医療現場における「医師の地域偏在・診療科偏在」という社会問題を扱った英文記事を題材としました。

論説文特有の論理展開（問題提起→現状→対策→課題）を追う読解力に加え、文脈から空所を補充する推測力、および複雑な修飾関係を含む英文を正しく構成する構文力を問いました。特に、“work-style reform”（働き方改革）などの時事的なトピックに関連した語彙や文脈理解を求めています。

#### ■採点講評

標準的な難易度でしたが、文脈把握の精度で明暗が分かれました。

10（正答率40.8%）では、「医療機関はもはや～できない」という文脈を作る“no longer”が正解でしたが、文法的につながりそうな“even more”（26.7%）を選んだ誤答が多く見られました。直前の文で「医師の残業規制が適用された」とあるため、過去のように長時間労働には頼れない（否定）という論理的帰結を導く必要があります。

整序問題の 13（正答率50.0%）は、“doctors who run their own clinics”（自分の診療所を経営する医師たち）という関係代名詞節を組み立てる問題でしたが、語順に迷いが見られました。名詞と関係詞、動詞の結びつきを正確に把握する力が求められます。

### III

#### ■出題のねらい

量子コンピュータという先端技術の概念を、教授が子供たちに比喻（自転車と宇宙船、迷路など）を用いて解説する会話文です。

専門的な用語が含まれていても、比喻表現を通じて大まかな概念を理解する柔軟な読解力と、会話の流れから発話者の意図（質問の意図や最終的なメッセージ）を汲み取る力を測りました。

#### ■採点講評

全体的によく理解できており、特に単語の言い換え問題（ “awesome” → “fantastic”）は正答率92.0%とよくできていました。

一方、 の正答率は36.4%と低調でした。教授の最後のメッセージ（子供たちが将来科学者になる可能性への期待）を選ぶ問題でしたが、誤答の選択肢④「部屋を作るのを手伝う人になるべきだ」（31.8%）を多くの受験生が選びました。これは本文中の“build one that works in a normal room”（常温の部屋で動くコンピュータを作る）という箇所を、文字通り「部屋の建設」と解釈したと推測します。文の細部にとらわれすぎず、話者が伝えたい核心（励ましや期待）を捉える姿勢が大切です。

### IV

#### ■出題のねらい

発達障害（ADHD）を抱えながら、葉っぱ切り絵アーティストとして活躍する Lito 氏のストーリーを読み解く問題です。

個人の背景や心情に寄り添いながら読む物語的な要素と、具体的な制作過程を追う説明的な要素の両方を理解する力を測りました。また、“no matter how” などの譲歩構文や、再帰代名詞、副詞の位置など、文法知識を長文の中で運用できるかを確認しました。

#### ■採点講評

内容一致問題（）は正答率83.4%と高く、主人公の心情や背景をよく読み取れていました。

しかし、文法知識を問う箇所では苦戦が見られ、最も正答率が低かったのは整序問題の（22.1%）です。「どんなに一生懸命やっても」を表す“no matter how hard he tried”の語順を正しく並べられず、形容詞“hard”や主語“he”の位置を誤った解答が多く見られました。譲歩の構文は入試頻出ですので、定型表現として理解しておく必要があります。

また、（正答率48.7%）では、文末に置いて「～もまた（同様に）」を意味する“as well”

が問われましたが、否定的な文脈で使われる“at all”（31.9%）を選んだ受験生が目立ちました。文が肯定的か否定的かを判断する基本的なチェックを怠らないようにする必要があります。